

一九九五年に入つて届いた香港の『鏡報月刊』一月号の徐四民論文によれば、鄧小平の江沢民に対する権力の引継は九四年に完了し、重要問題は鄧小平に相談するという党中央秘密決議が実際に使命を終了したとされる。また、鄧小平の健康状態も、完全な引退を裏づけるものとしてオープンに報道されるようになった。鄧小平の新しいイニシアティブが予想されなくなった結果、鄧小平時代を総合的に評価できる時機が到来したといえる。

アジア経済研究所動向分析部では、一九八九年から二年間「アジア各国現代史の諸問題」研究会を組織して、一九六〇年代以降三〇年間にわたつて進めてきた現状分析を国別にまとめて現代史として叙述するために、資料整備と方法論を検討してきた。筆者は中国について執筆の準備を進めたが、大幅に遅延し、やっと完成にこぎつけることができた。研究所の寛容に感謝したい。

まことに偶然の結果であるが、執筆終了時点で、鄧小平時代に一応の全体的評価を与える時代的背景が整つてきた。しかし、本書は、直接鄧小平の功罪を論ずるものではなく、各段階における中国の状況の中で鄧小平がどのような政策選択を行なったのか、について解明の努力をしたつもりである。鄧小平時代に関する評価については、本書全体の中から読者によって汲み取っていただくべく、読者諸氏の評価に素材を提供できればこれに過ぎる喜びはない。

中国の現代史の叙述は、少なくとも中華人民共和国の成立から始める必要があるが、本書では毛沢東主席死去以降、特に鄧小平時代にしぼった。これは、何よりもこの時期は筆者が中国情勢の分析を積み重ねてきた時期であり、また、鄧小平以後という状況に直面している中国について考える上で、鄧小平時代の政策展開の道筋を整理しておくことに差し迫った意義があると考えたためである。資料、情報等の制約があるが、なるべく政策決定の実態に迫るように努めた。各方面のさらなるご教示をお願いしたい。

筆者の中国研究は、アジア経済研究所時代二七年間の先輩、同僚の協力のもと、切磋琢磨してきたことと切り離すことはできない。ここで改めて長年の協力に感謝の言葉を述べさせていたいただきたい。

本書の執筆に当たっては、多くの、日本はもとより中国の友人たちの助力を得ている。ひとりひとり名前を挙げることは控えさせていただくが、特に、資料を提供していただいた毛里和子氏と、拙著『鄧小平時代の中国経済』からの引用を快く認めて下さった亜紀書房の棗田社長には謝意を表したい。

最後に、コメントをいただいた、木村哲三郎、浅野幸穂、竹下秀邦、大西康雄の各氏に感謝すると同時に、出版の労を執られたアジア経済出版会に、これまでの仕事におけるご協力も含めて深い感謝を捧げる。

一九九五年二月一日

筆者